

編集後記

2つの団体のインタビューを聞いたとき、真っ先に頭に浮かんだのは『つなぐ』という言葉でした。よむよむ☆ママさん隊は、人と人を絵本が『つなぐ』。北の川探検隊では、人と故郷を自然が『つなぐ』。そしてこの2つのつながる先は次の世代なのだと思います。

言葉というのは不思議なもので、英単語や熟語などはすぐに忘れてしまいますが、何年経っても忘れずに、心の片隅に残っている言葉もあります。それは人から言われた言葉だったり、本の中にある言葉だったりします。今は読み聞かせの際に実物投影機なるものを使用することもあるそうです。伝え方も進化していて、大人になった今だからこそ体験してみたいと思いました。

体験は一生の財産です。私が就職するのに故郷を選んだのは、少年期の自然体験も大きな要因です。ずっと同じところで生活していると、良さに気づかない、あるいはわかっているつもりになることがあります。そんな中、五感を使って気づきを見つける体験は貴重なものだと思います。

本誌は、記事にさせていただいた方々と読者の皆様を『つなぐ』。そんな存在でありたい。最後に心に残っている言葉を・・・「希望とは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなればそれが道になるのだ。」 『故郷』より

(T)

— Special Thanks! —

あかつきダイニング
A マート
川北郵便局
郷土料理武田
ぎんれい精肉店
くるくる2
合田商店

後藤商店書店部
標津漁協直売所
標津郵便局
セイコーマートこんどう標津店
セイコーマート標津まるよし店
セブンイレブン標津町店
大地みらい信用金庫標津支店

ファミリーレストランいしばし
福住
ホームックニコット
Kuni OFFICE
北の川探検隊
よむよむ☆ママさん隊
*五十音順・敬称略

Follow us on Facebook & Instagram & Twitter !!!

記事に収まらなかったこぼれ話やインタビューの様子などを更新！検索してみてくださいね。

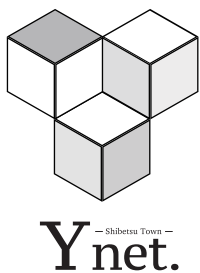


— Information —



2018 年 7 月 27 日 発行
発行人 Ynet.
発行所 〒086-1632
北海道標津郡標津町北2条西1丁目1番3号
標津町役場企画政策課内
TEL.0153-82-2131
FAX.0153-82-3011

●次回発行は 2018 年 10 月の予定です。



発刊にあたって

皆さんこんにちは。本紙を手にとっていただきありがとうございます。私たち「Ynet.」は町民活動の活性化、町内ネットワークの拡大・構築を目指し組織された役場職員で構成するグループです。標津町には様々なまちづくりに関係する活動をしている団体や個人の方がいて、実際にお会いしてみると、標津町にはこんなにも味わい深い人たちがいるね、っと気づかれました。本紙の表題「sipeto(シベット)」は標津の語源になったとされるアイヌ語「シベツ」と日本語の「人(ト・to)」を掛け合わせた造語で、標津に住む活動的な方々をたくさんの方に知っていただきたく名付けました。

sipeto を通じて人の活動に込められた『想い』に触れて、知って、共感して、共に活動する方が一人でも増えることになればうれしく思います。

Ynet.



北の川探検隊

月に1回程度、地域の子どもたちを対象に、標津町を中心とする知床半島基部の川をフィールドに、“その季節、その場所だからこそできる遊び”をテーマに活動している。

Activity Introduction

— いつもの活動をご紹介 —

「本当の自然との向き合い方が少しわかったような気がする」、「名もなき滝の自然観に圧倒されながら、生き物との触れ合い方を教えてもらった」、「ただそこにある自然を子どもたちはまるで自分たちのもののように慣れ親しみ、大人に守られた遊びではなく、自由な発想の遊びがあった」・・・これは活動に参加したことのある人たちの言葉。こんなにも恵まれた自然環境そのものが標津ならではの、人を育てる力ではないだろうか。子どもたちは遊びの中から無意識に学んでいる。自然の中に身を委ねること。それはふるさとを自慢に思い、誇りを感じ、大切にすることに必ずつながっていくだろう。

【information】

2018 年 7 月 29 日 (日)、森と川のようにちえんコロボククル「森であそぼう!」を、きつつきの森で開催！詳細はこちら▼



facebook



blog

よむよむ☆ママさん隊

毎週水曜日、読み聞かせの時間帯 10～15 分、小学校や時には中学校で絵本の読み聞かせをする。その他、おすすめの本を紹介する展示コーナーの設置など、読書への啓発も精力的に取り組んでいる。 ※メンバー随時募集中



とある水曜日、よむよむ☆ママさん隊の読み聞かせを小学校に見学に行くと、元気いっぱい大きな声で「おはようございます!」と子どもたちがあいさつをしてくれた。とても気持ちの良い朝。絵本の読み聞かせが始まるとさっきまでざわついていた教室が途端に静まり、子どもたちが絵本にかじりついている。優しく柔らかいママさん隊の読み聞かせは絵本のストーリーにすんなり入り込ませてくれた。色々なストーリーにふれ、感受性豊かな素敵な大人になってほしいと感じた。



Take Free

しべつろーかるふりーペーぱー

sipeto

Shibetsu Civic Pride Project by Ynet.

[CONTENTS]

発刊にあたって

Activity Introduction

Interview

- 04 北の川探検隊 - 05 よむよむ☆ママさん隊

編集後記

and more



Touch,
Know,
Sympathize,

Interview

子どもって、
やっぱり体験が好き。

04 北の川探検隊 ---KITANOKAWATANKENTAI---



一活動を始めたきっかけを教えてください。

拓真 大学生の時に僕らの師匠がいて、その師匠というのは当時のサーモン科学館の主任学芸員で、標津町をフィールドにふるさと教育の授業とか、実践例をつくる活動をしていた。その内容ってというのが、サケを通じて地域を見ていくこと。その活動にどっぷりはまっていたのがきっかけ。

郁恵 大学生の時は忠類川が私たちの学びの場だった。

拓真 それから大学院に進んだ時に、標津町で「忠類川探検隊」っていう地域の子どもや大人を対象にした自然体験活動が不定期に開催されていた。その活動が中断状態になった時、アップグレードっていうとおがましいけど、当時の私達がそのベースの部分は引き継ぎながら活動を立ち上げた。クチコミや自分たちのつながりがある中で子どもたちを中心に少しずつ広がっていった形。

一となると、大学院生の頃に活動が活性化し始めたの？

郁恵 そうだね、大学院生のときかな。川の活動だけでなく、酪農実習もやってたし、地域資源を知るための実習もあって、例えば羅臼昆布を学ぶための授業づくりもやっていたんだ。地域の姿を浮き彫りにしていくような、教材とかフィールドワークとか、全体的に学んでいた時期が大学にいた6年間だった。その軸になる活動が川探検じゃないかな、標津で川探検をやりたいねってお互いに思って。標津は私のふるさとでもあったし。やるなら地域に密着した活動をやっていきたい思はすごくあった。面白いのは、こっち（夫）は標津がふるさとではなくて東京とか札幌とか都会の人ということ。
拓真 いろんな理論とか理屈はあるけど、師匠についてまわって、自然の中で活動する中で、とにかく感動したんだよね。何よりも楽しかった。

一この地域のフィールドに感動した？

拓真 そう。忠類川の上流部とか、こんなすごいところがあるのか、こんなにきれいなところがあるのか、と。あと単純に魚釣りが楽しかったり。もう、その体験が強烈で。その強烈な体験というのは不思議で、誰かに伝えたいくなる。滝壺にドボンと飛び込むと目の前に数十匹のサクラマスの群れがひゅんひゅん泳いでいたりとか、オシロココマの群れと一緒に泳いだりとかね。それが原体験になっている。



写真：水口さんご家族（拓真さん、郁恵さんと息子さん達）と森づくりのパートナーである馬のアーク



水口さん自宅前の“きつつきの森”エントランス

一北の川探検隊の活動コンセプトは？

拓真 簡単にいうと、その季節、その場所で、そこに身を置くことでしか感じるができない価値やそこから見えてくるリアルな地域の姿を大事にしたというのが、北の川探検隊のコンセプト。これに基づいて全てのプログラムを作っている。

郁恵 仕込んでいる部分はあるけど、基本的には子どもたちに事前に教えたり知らせたりすることはしないんだよね。子どもたちが自然と遊んでいく中で見つけたり、吸収していったりして、自分の中で気づき、蓄積されていくことを大切にしている。
拓真 子どもって、やっぱり体験がいるんなことを知っていく上でベースになるし、体験による認識の割合がとても大きい。大人になるにつれてその割合は変化していくけど、五感で感じるところから得るものが多いから。

一最近の活動の状況はどんな感じ？

拓真 2004年に正式に発足していて、ざっくりいうと月に1回の頻度、準備期間や天候が不安定でやれない時期もあるけど、年間で10回程度を目標に14年間やり続けている感じかな。

一標津への愛着や誇り、子どもたちに引き継いでもらいたいことは？

拓真 大きくは三つ。ふるさと教育や環境教育といった理論的な部分もあるんだけど、自分が暮らしているふるさとのことを自分の言葉で語れるようになったら素敵だねという話をよくしていたのが一つ。二つ目は、斜里岳ってものすごく存在感が大きいでしょ。見た目もそうだし、心の部分での存在感も大きいと思う。斜里で育った人が「他の地域に行って自分のふるさとのことを思う時にやっぱりあの存在感を思い出す」という話を聞いた。じゃあ標津町においてそういったものって何かって考えた時に、自分は名もなきたくさんの川の風景であるような気がしている。

そして三つ目。これも感覚の世界なんだけど、ある写真家の言葉で、「様々な人生の岐路に立つ時、人の言葉ではなくていつか見た風景に励まされることがきつとある」って言葉があって、それが大好きで。“いつか見た風景”が自分の暮らすまちにあって、流れる川で遊んだ時の風景だったら素敵だねと。
郁恵 それを標津出身でもない人が熱く語っている姿を見て思ったことは、そこに生まれ育ったからふるさとってことじゃないんだよねきっと。そうではなく、自分が大事にしたいなって思う何かがないと、そこはふるさとなり得ないんじゃないかな。だから、北の川探検隊によって私たちは子どもたちにふるさとだと思えることをつくってあげたいっていう思いがきつとあるんだと思う。



きつつきの森から望む斜里岳

絵本はいつでも
心の片隅に。

05 よむよむ☆ママさん隊 ---YOMUYOMU☆MAMASANTAI---



一よむよむ☆ママさん隊がスタートした、経緯を教えてください。

高橋 最初のメンバーは、私と長谷川さんの2人でした。最初は、中休みの15分間を利用して始まったので、どうぞ好きな子は「聞きに来てください」という形でした。外に遊びに行ってしまう子もいたり、本当に本が好きな人15人くらいが集まって聞いているという感じです。平成12年生まれの子の1番下の娘を机の上に載せて始めたので、大体平成12年か平成13年には始めていると思います。

一今の構成メンバーを教えてください。

高橋 12人くらいで、限定はしていませんが、子育ての現役か現役を卒業したお母さんたちです。川北からも2名来てくれています。

一名前の由来は？

高橋 「よむよむ☆ママさん隊」の名前は子どもたちから募集しました。名前が付いたのは、平成22年頃だと思います。それまでは、「読み聞かせボランティア」だよね。

一どういった活動をしている？

高橋 基本的には毎週水曜日、朝の会の前の10～15分で絵本の読み聞かせをしています。それが終わると学校の図書室で、次の打ち合わせとか本の選定をしています。職員室前の廊下にある私たちの本の紹介コーナーに本を並べたりもしています。
和田 活動の内容として、読むということがありますが、本を選ぶということが1番時間が長いかもしれませんが、各自自分の時間を使って、新しい本や、打ち合わせの時にこんな面白い本があるよ、と持ち寄って紹介しあったりしています。学校では出会わないような本を展示コーナーで紹介しています。
大畑 本を10分で読み終えないといけないプレッシャーもあります。（笑）

一活動してよかった点は？

和田 私は、標津町に移住してきたので、子育てのことを先輩ママさんからいろいろ教えてもらったり、交流が楽しい。それがすごく良かったなと思う。この活動がなかったら孤独に暮らしていたのかな。
高橋 お母さん方の交流かな。打ち合わせしながら



写真：左から和田さん・高橋さん・大畑さん・山口さん

も結構子どものこととか、昔でいう井戸端会議が楽しいのかも。それがメインではないですけど、楽しみで来てくれているのかなと。居心地の良い場所かなと思っています。

山口 幼稚園で読んだ時に子どもたちがとても良い顔をしていてくれて、そういうのが楽しいと思う。いろいろ顔、普段とは違う顔が見れるし。
和田 卒業の時に中学生の子が感謝のお手紙をくれたりして、これを見たらまた頑張ろうって思った。



子どもたちからの感謝の手紙

一メンバーは募集していますか？

高橋 随時募集しています。どうですか？出勤前に。（笑）
和田 子どももおばあちゃんの声で聞くのと若いお姉さんの声で聞くのとで感じ方が違ってくる。いろいろな人が来てくれるといいなと思います。同じ本でも違うなと思います。男性の声も良いものです。

一標津への愛着や誇りに思うことは？

和田 水キラリの紙芝居「ウラップ伝説」を夏休み前に最後読むようにしているんです。意外とその伝説を知らないの、子どもたちには、地縁を深めるという意味で、伝説を伝えるお手伝いをしながら。
高橋 1年生に読んでいますね。
和田 結構みんな知らない。「知っている？」と聞いたらクラスに1人くらいしかいない。

想いを言葉にする。

